第三回主宰共同研究「旅と『万葉集』」

万葉古代学研究所長　寺川眞知夫

共同研究の目的と成果

日本学術会議は現在の学術研究が抱える問題点として、「研究内容の細分化が進み全体像がみえにくくなっていることから、国民一般には理解しづらい状況となっている。」(文部科学省のHPより抜粋)と指摘する。万葉集研究も例外ではない。

万葉古代学研究所ではこのような問題点の克服をめざし、万葉集研究を総合的な学としての古代学の中において、国際的・学際的な研究方法を導入することでその打破を目指しており、第1回（テーマ「ユーラシア大陸と『万葉集』」)・第2回（テーマ「古代儀礼と『万葉集』」）の主宰共同研究をおこなってきた。

本研究プログラムは、これまでの主宰共同研究の基本理念を継承・発展させるものである。今回の主宰共同研究では『万葉集』で大きな位置を占める羈旅歌とのかかわりで、「旅」をとりあげた。「旅」の歌は、離別の悲しみ、旅先への心理的・即物的な不安、家郷から離れた人の、そこへむけられる後向きの視点と周囲あるいは前へむけられる視点、など多様な要素が入りまじって、生みだされる。視点・心をいずれにむけて表現するかは歌人の個性であるが、他方には旅そのものを生活の場とし、その心を表現する者もいる。また、それらの表現方法は地域・時代・人によって異なる。本研究では、そうした旅の歌のもつ普遍的性格を、第一義的には行幸従駕歌・官人の任務にともなう羈旅歌などを収める『万葉集』固有の問題と密接にかかわる問題として捉えるが、もとより文学全般にとっても大きなテーマであり、その一環としても捉ええる。かつまた、万葉集研究においては、普遍性と固有性を考えさせる「旅」の歌を切り口とし、国際的かつ学際的な視点からアプローチしえる課題として、これを捉える研究は現在までみあたらなかった。

本研究では『万葉集』の「旅」にかかわる歌に焦点をあてながらも、「旅」が『万葉集』の歌をふくむ文学生成の基盤に深くかかわるものであることに注目して、旅と歌・文学の生成との関係を多面的包括的に考察することを目指した。そこで、共同研究では歴史学・民俗学・ヨーロッパ文学・インド文学・中国文学・ロマの音楽文化・他の日本文学の作品など、異なる分野における旅にかかわる研究方法と研究成果の報告および意見交換をおこなった。『万葉集』の旅の歌が歴史的には飛鳥時代から奈良時代にかけての日本の歴史性・社会性、作家の個性に制約されて成立したように、他の世界の歌もそれぞれに独自の歴史性・地域性・社会性、歌い手の個性に制約されて固有性をもつ歌として成立している。しかし、それらを比較することによって、『万葉集』の普遍性も独自性も浮かび上がってくると期待して行った。

共同研究実施概要

共同研究は年六回、万葉古代学研究所共同研究室において、原則として午前10時から午後4時までの5時間、二人の報告若しくは講演と質疑応答ならびに討議という形式でおこなった。報告者・講師とテーマと概要は以下の通りである。

第一年度(平成20年)は、予定通り計6回の共同研究会、うち計5回(10名)の研究報告会をおこなった。概要は以下のとおりである。

第1回の研究会（7月13日（日））で文学の発生にかかわる問題を「旅」というキーワードを手が

かりにしながら以後の研究会での研究員の報告テーマを設定した。

第2回研究会（8月31日（日））では、まず佐伯順子講師（同志社大学教授）の「旅と遊女について」と題する報告がおこなわれ、『万葉集』の「遊行女婦」の歌の考察には日本の中世から近代にみられた遊女・妓女の音曲も視野に入れて考察する必要のあることが報告・議論を通して確認された。

松尾光研究員（元万葉古代学研究所副所長・早稲田大学非常勤講師）からは、「『律令』・『風土記』・『霊異記』にみる旅」と題する報告がおこなわれた。歴史学の立場から日本古代律令制における旅の定義、歴史書等にみえる旅の事例等に基づき、『風土記』、『日本霊異記』などの物語レベルにおいてそれらが如何に表現されているかの検討がなされ、これを受けて『万葉集』の旅がいかなる律令の規定のもとでなされていたのか、議論がおこなわれた。

ジェラルド・グローマー講師（山梨大学教授）からは「瞽女の旅と音楽について」と題する報告がおこなわれた。近世・近代の越後における瞽女（盲目の女芸人）の文学や音曲を視野にいれるとき、その時代・地域・社会的位相の相違は歌の性格の相違となって現れるが、歌に女性・芸人・旅・音楽などがからむという共通性も認められることが指摘された。議論を通して、これらの基礎資料を『万葉集』に具体的にどのようにリンクしさせえるか、どのような歌の生態が浮かび上がらせ得るか、今後も比較検討を通じて考察を深化させる必要のあると確認された。

第3回研究会（9月1日（月））では、大木康講師（東京大学東洋文化研究所教授）から「憑夢龍『山歌』と妓女」と題する報告がおこなわれ、中国の明朝末から清朝初頭にかけての遊女の歌った『山歌』について音楽の視点から考察され、山歌は漢詩などとは社会的位相を異にする民衆の歌であり、遊女も思いを率直に歌ったのであるが、その山歌は中国古代の旅とかかわる面をもっているとの報告がなされた。漢詩と山歌の関係は和歌と民謡の関係と比較研究の必要性のあることが議論のなかで確認された。

大館真晴研究員（万葉古代学研究所主任研究員）からは「『日本書紀』にみる天皇の移動表現―「幸」・「巡」を中心に―」と題し、『万葉集』に行幸の際の歌が多く収録されていることとの関連で、基礎史料としての六国史の中で行幸が如何に表現されているかを整理し、この資料に基づく考察が報告された。その後の討論では、木簡などの当時の実態に即した史料と対比しつつ、物の移動を含む交通路や交通状況も視野に入れ、行幸従駕歌や羈旅歌の位相も考慮しながら作品理解を深めていくことの必要性が論じられた。

第4回研究会（10月13日（月））では、井上さやか研究員（万葉古代学研究所主任研究員）から「『万葉集』における「旅」」（基礎資料）と題し、『万葉集』における「旅」および旅に関連すると想定できる要素にも注意して抽出した基礎資料にもとづいて、旅の表現の諸相についての報告がなされた。旅のすべてが困難や苦しみを伴うわけではないとの認識も旅の歌の検討には必要なことが指摘された。

後藤明講師（南山大学教授）からは、「海を渡ったモンゴロイド」と題する報告があり、文化人類学の立場から、神話・伝承の共通性にもとづき、モンゴロイドがどのようなルートを辿って各地に移動していったかの報告がなされた。

その後の討議では、多岐にわたる旅の状況からみて「旅」概念の概念規定の難しさを再認識することとなり、何をもって「旅」とするのか大きなテーマとなった。環太平洋地域に共通する釣針喪失型神話の形成と人類の移動・船とかどのようにリンクしているか、また『古事記』にも採録された意味は何か、も議論となった。

第5回研究会（1月12日（月））では、竹本晃研究員（万葉古代学研究所主任研究員）から「正倉

院文書と木簡からみた移動」と題して報告がなされた。『万葉集』の詠まれた当時の実体を表す一次史料である『正倉院文書』と木簡の中から、移動に関する史料を抽出し、移動にあたって発生する行政文書の流れと実際の人の動きとを追い、それが「旅」として認めうるか、旅先で歌をよむ状況にあったかなどの問題について報告がなされた。

その後の議論においては、公務の使いが宿る場所と時間の問題を手がかりに、召喚使の公的施設の利用時に用務の異なる人たちが同じ席で歌をよむ可能性の有無、家に帰ることを熱望する実態史料は『万葉集』に歌われる、家を離れることを寂しいと表現する感覚と同質性をもつか否か、「旅」の時間はどの範囲をいうか、などがテーマとなった。

また第２・３回研究会で課題となった交通について実体面からの基礎的考察もあわせて討議され、修行僧の旅、宗教者の移動についても視野にいれるべきとの指摘があった。こうした議論を通して、旅の歌は、何時、何処で、どのような情況のもとで詠まれ、歌に表現された内容と現場にはどれほどの時差があるか、宿泊は旅の歌生成の指標としうるか否かなどが検討された。

第６回研究会（３月１日（日））では、辰巳正明研究員（国学院大学教授）から「死者の旅―敦燈「十王経」と苗族「焚巾曲」をめぐって―」と題した報告がなされ、死者の旅の解明を目的として、敦煌「十王経」に描かれた死者の辿る地獄までの行程と中国の少数民族における葬送儀礼の行程との共通性の比較検討がなされ、『万葉集』挽歌にみえる天の石門の表現との関連についても考察がなされた。

藤田富士夫講師（富山市教育委員会理事・埋蔵文化財センター所長）からは「考古学からみた大伴家持の越中国巡行・珍敷塚古墳の蕨手文・翡翠について」と題する報告がなされ、①大伴家持の越中国巡行については、考古学の発掘成果にもとづけば従来の想定コースを大幅に修正する必要があること、②翡翠の流通については、翡翠の原石の産地（姫川）・加工地と製品発見地との関係を考えると、移動は縄文・弥生時代を通して海路を想定すべきこと、新羅王の翡翠装飾冠からも日本海海上交通や東アジア文化圏を考える必要性のあることが指摘された。

その後の討議では、珍敷塚古墳の壁画に描かれた図にみえる死者の世界に通ずる天門（死者の旅路）と苗族の「焚巾曲」の天上世界や万葉集挽歌にみえる高天原の石門の観念との共通性が話題となった。

第２年度（平成２１年）は第１年度の研究成果を視野にいれつつ、引き続き『万葉集』の羈旅歌などを軸に「旅」をキーワードとして、『万葉集』の普遍性と固有性とを探った。

第７回研究会（７月19日（日））では、寺川眞知夫研究員（万葉古代学研究所長・同志社女子大学教授）の「柿本人麻呂の旅―人麻呂は旅において景観をどのように表現したか―」と題した報告がなされ、柿本人麻呂は遠い地方へ旅をしているわりに、その各地での歌は情景の描写に無関心とみえる性格をもつとの指摘がなされた。

加藤耕義講師（学習院大学教授）からは「グリム童話における旅」と題した報告がおこなわれ、グリム童話の中にみえる「旅」を形態分類し、これらでは立ち寄った具体的な場所（地名）よりも、そこで何が為されるのかが重視されているとの指摘がなされた。

その後の討議において、旅をして得る物の有無や歌が詠まれる際の条件、都市と地方との価値観の差異、また、伝説では地名が重要であるが、童話においては不要であること、グリム童話においては旅立ちにあたって何の準備もないことから「旅」をどう認識していたかが問われること、他方で日本の昔話との共通点も多いことなどが議論となった。

第８回研究会（７月20日（月・祝））では、高橋孝信研究員（東京大学教授）から「南インド古代の詩人のための旅行案内記」についての報告がなされ、南インド地域の旅芸人に伝承される詩を取り

上げ、案内記や王の讃歌として捉えられてきたこれまでの見解に対して修正の必要があることが提起された。

宮家準講師（慶応大学名誉教授）からは「日本宗教における旅―宗教民俗学の立場から―」と題する報告がなされ、社寺参詣や巡礼などの「旅」にかかわる項目を取り上げて、宗教民俗学の立場から相対的に「旅」が論じられた。

その後の議論において、卓越したプロの旅芸人の詩を目標として詩が模倣されていく様態は、『万葉集』における柿本人麻呂・高市黒人歌などと後続歌人の歌の関係に通じること、N・H・グラバーンによる旅の定義である、「日常生活に織り込まれつつ、それを再活性化する非日常的な聖なる営み」の意味を敷術すべきこと、巡礼・遊行においては各所を訪れるだけでなくそれぞれの場所において潔斎などの宗教的な儀礼を伴うことが重要であること、などが議論された。

第9回研究会（8月30日（日））では、神崎宣武研究員（旅の文化研究所長）から「酒にみる伝統と変容」と題する報告がなされ、酒の種類・醸造法・呼称などについての考察から、「酒（サケ）」の「ケ」を「気（日常・食べ物）」と捉え、ケ→ケガレ→ハレと循環する際にハレの要素として「酒」と「旅」が含まれていることが指摘された。

ウエッブ・ジェイスン講師（東京大学東洋文化研究所准教授）からは「アメリカ南部の歌謡における『旅』」と題して、アメリカ南部の歌謡に現れる「旅」の諸相を検討し、「旅」の始まりが現状への不満や自由へのあこがれによること、そして「旅」の結末はホーム（故郷・家）に帰ることを前提にしていることなどが報告された。また、キリスト教の影響下においては、しばしば人生が「旅」にたとえられ、ホームへ帰ることは死を意味すること、その場合の死は帰還の歓びとして表現されていること、「旅」はホームへのあこがれを確認することに本質があるとの指摘がなされた。

その後の討議において、旅と酒との関係を別の角度からする説明の可能性、旅人による酒の調達の方法、照葉樹林文化圏における米酒のルーツ、また、アメリカ歌謡におけるアフリカ音楽の影響の有無、南部歌謡の無記名性と聖書との関係、旅先での故郷理想化の普遍性、などが議論となった。

第10回研究会（11月22日（日））では、廣田律子講師（神奈川大学教授）から「祭祀儀礼に見る旅―中国湖南ヤオ族の通過儀礼を事例として―」と題する報告がなされ、中国湖南省藍山県ヤオ族の通過儀礼を事例として、儀礼にあらわれる陰界への旅や旅の詩などによって、祭祀儀礼にみえる「旅」についての考察が報告された。

兵藤裕己講師（学習院大学教授）からは、「平家物語と旅について―旅の神、道祖神、シュク神、地神―」と題する報告があり、盲目の琵琶師蝉丸について石塔で弔うこと、および異界との堺にある逢坂と深くかかわることとを手がかりとして、そのシュク神としての性格を明らかにし、これにもとづいて「旅」との関係性が論じられた。

その後のディスカッションにおいて、盤古と盤王との区別、漢族の盤古神話とヤオ族の創世神話との関係、ヤオ族の祖先の移動ルート、ヤオ族の経典にみる司命竜神の五竜と日本の五竜王との関係の有無、蝉丸の「せみ」における特別な意味の有無、地霊信仰と母子神信仰の関係、などについて議論がおこなわれた。

第11回研究会（11月23日（月・祝））では、伊東信宏研究員（大阪大学准教授）から「ロマ（ジプシー）の旅と音楽」と題する報告があり、北西インドから出発して西へとむかったロマの旅を中心に、ロマの生業と旅、音楽と旅との関係などについての論が展開された。

曹咏梅研究員（万葉古代学研究所主任研究員）からは「放浪詩人金笠について」と題する報告がなされ、朝鮮半島の放浪詩人金笠について、その作品形成の背景となる家族関係、作品から読み取れる

彼の旅の性格を考察し、彼には当時の社会制度、特に両班貴族や科挙制度に対する不満があり、旅自体が社会への反発を象徴するものであったことが論じられた。

その後の討論において、ロマが東ではなく西へとむかった理由、定住せず、ずっと旅を続けている理由、19 世紀のロマの音楽とアジア民間歌舞との共通性の有無、移動するのはインドで迫害を受けた人か否か、移動時における死者の扱い、金笠と仏教との関係の有無、金笠の詩における白話的要素の多い理由、韓国文学と五山文学との関係の有無、科詩の創作は両班への反発より両班階級に依存した生活を意味するものではないか、などについて議論がなされた。

第 12 回研究会（12 月 20 日（日））では、上野誠研究員（万葉古代学研究所副所長・奈良大学教授）から「宅庄往来の文芸」と題する報告がなされた。この報告ではまず、これまでの 11 回にわたる研究会の報告内容を宗教者・芸能者の旅の特徴、旅と異文化の発見、物の移動、旅びとへの憧憬と蔑視、宗教儀礼と霊界の旅とを総括し、今後は古代的な旅とは何かについて考えなければならないと指摘がなされた。続いて「宅庄往来の文芸」について論じ、『万葉集』に詠まれる大伴氏の「タドコロ」に注目して、当時の貴族は主に農繁期に「庄」に出向いたことを述べ、「宅」と「庄」との往来は 8 世紀を生きた貴族にとって小さな旅であったと結論づけた。

その後のディスカッションにおいて、貴族の領有地「田」と「庄」について土地を与えたという記録があるか、貴族の「タドコロ」の労働力と当時の在地豪族との関係はどのようなものだったか、貴族の荘園は野菜を作る畑と米を作る田にわけて考えるべきではないか、坂上郎女が直接「庄」まで出向くのはなぜか、当時の家刀自の役割は何か、「都」の範囲をどこまで意識したか、などについて討議がおこなわれた。その後 2 年間の研究を総括するディスカッションがおこなわれた。

また、平成 22 年度秋のシンポジウムは、今回の共同研究の内容をわかりやすく説明するべく、テーマを「人はなぜ旅をするのか―万葉集と世界の〈旅〉―」とすること、日程は第 1 候補日：2010 年 10 月 10 日（日）、第 2 候補日：10 月 11 日（月）とすることが決定された。

本共同研究においては、『万葉集』に即した報告だけではなく、『万葉集』とはおよそかけ離れたようにみえる報告もあろうが、いずれも『万葉集』の羇旅歌の直接・間接の文化的背景を考えさせる報告であったと考える。『万葉集』の羇旅歌の成立する基盤と共通の文化をもちながらも、そうした歌の生まれない世界、あるいは異なる相貌をみせながら旅の歌を生み出している世界、世界にはさまざまな文化と歌の基盤があり、そのことを前提にして考えてみるべきさまざまな課題を与えられた。

個人的な感想を述べると、第 8 回の高橋研究員の報告、第 9 回のウエッブ・ジェイスン講師の報告などは、汎世界的、汎通時的な普遍性も窺える旅の歌の性格が浮かび上がってきたように思う。第 10 回の廣田講師の報告、第 11 回の伊東研究員と曹咏梅研究員の報告もまた、『万葉集』そのものとは直接かかわらないようにみえるが、旅が歌とかかわるありようを考えさせる報告であった。第 2 回の松尾光研究員の報告、第 3 回の大館研究員、第 5 回の竹本研究員の報告は、『万葉集』の時代の歴史的事実の具体的検討を深める必要性がより明確にされたように思う。

先に触れたように、多くの先生方に研究会に参加いただき、多様な視点に立った歌と旅にかかわる研究報告と討議への参加を得ることで、『万葉集』の旅の歌だけでなく歌の生まれる背景をなしている文化についても目をむけてみるべき多くの課題があるとの示唆を得た。この共同研究によって研究員全員がそれぞれの研究課題にかんする示唆とともに、『万葉集』の旅の歌が有する文学としての多様性、万葉集の旅の歌を世界文学の中に定位して普遍性と固有性を明らかにする手がかりを得ること

ができたものと考える。

注　本稿は主宰共同研究の目的、二年度に亘る研究報告書に依拠して纏めたものである。